

ドイツの建築について

小山 和紗

1 はじめに

今回のドイツ派遣では本当にたくさんの建物や施設を見学でき、それらについての話も聞くことができた。建築を学んでいる私にとってとても魅力的な時間となった。この報告書では、その時に見聞きしたことを中心に、ドイツ・アウクスブルクの建築についてまとめていこうと思う。

2 アウクスブルク大聖堂

アウクスブルク大聖堂には2つの有名な点がある。1つ目は2つの建築様式が使われている点である。西洋建築では時代が変わるごとに建築様式も様々に変化してきた。そのためほとんどの建築物は1つの様式からできている。しかしアウクスブルク大聖堂にはロマネスク様式とゴシック様式の2つが併存している。ロマネスク様式は11世紀から12世紀にかけて使用された建築様式である。主な特徴として厚い壁、太い柱、半円のアーチがある。また民衆に対して閉鎖的なものであったため、あまり光を取り入れないスタイルであった。対してゴシック様式は12世紀中ごろから16世紀ごろまで続いた様式である。技術の進展もあり、大きい窓やステンドグラスを設けより多くの光を取り入れるようになった。さらに尖頭アーチ(先端がとがったアーチ)、交差リブヴォールト(天井の構造)などで高さを強調した様式である。なぜこのように全く異なる二つの建築様式が1つの建物に用いられているのか。アウクスブルク大聖堂は初

め、ロマネスク期に建物西側が建築され、その後ゴシック期に東側が増築された。ドイツでは建物を建て替える際、すべてをくずして新しい物を建てるよりも、新しく付け加えることが一般的である。そのため2つの様式が一緒に存在するようになった。



アウクスブルク大聖堂外観



尖頭アーチとヴォールト

2つ目は、現存する世界最古のステンドグラスがあること。アウクスブルク大聖堂のそれには旧約聖書に登場するダニエルをはじめとする5人の預言者が描かれている。

ステンドグラスがより使われるようになったのはゴシック期に入ってからであるが、このステンドグラスはロマネスク期に作られたものである。



世界最古のステンドグラス

3 アウクスブルク市立図書館

尼崎市にある中央図書館は、派手で奇抜、鮮やかという印象よりも、静かで儼かな雰囲気がある。それに対しアウクスブルク市立図書館は、外観がガラス張りで目を引き、中に入ってもまず明るいという印象を受けた。入口すぐの床と中央にある階段がオレンジ色で、壁が白色で統一されていることがその理由として考えられる。またもう一つの明るさの理由に、自然光をたくさん取り入れているということも考えられる。先にも述べたように、南側と北西側はすべてガラス張りになっていて、その周辺に設けられた読書スペースは非常に明るくなっている。さらに階段の上部が一番上まで吹き抜けになっていて、その最上部にある天窓からたくさん光が入ってくる。また天窓とは別に、3つの筒状の物体が天井に付いていて、中にはいくつもの面を持つ、鏡のような反射板がついている。太陽からの直射光がその筒を通り、何度も反射し拡散されて様々な場所を照らしていた。このように電気による明るさの割合よりも、自然光の割合が多く、本を読んだりくつろぐ場所と

してとても心地よい空間となっていた。

また窓際には、机やいすだけでなく寝ころびながら読書ができるスペースや、児童図書の間には子どもが遊べる遊具があるなど、アウクスブルク市立図書館は日本のものとは違う魅力がある図書館だった。



図書館中央の階段



アウクスブルク市立図書館外観

4 アウクスブルク市庁舎

アウクスブルク市庁舎とは日本でいう市役所のことである。この建物は1615年から1620年にかけて、エリアス・ホルという建築家によって建設されたルネサンス様式の建物。北方(アルプスより北側)のルネサンスの最高傑作と言われている。第2次世界大戦で全壊してしまっただが、戦後復元され

今の姿となった。市庁舎の見どころと言えば部屋中に金がふんだんに使われている黄金の間である。天井にはたくさんの絵が飾られており、壁面にも絵が描かれている。この建物は戦前のものを復元しているが、壁面の一部には当時のものを再び利用しているところもある。またこの絵の中にコンパスを持った男性がいるが、彼がエアラス・ホールであると言われている。



黄金の間の天井

5 シェッツラー宮殿

シェッツラー宮殿は1765年から1770年にかけて建設されたロココ様式の宮殿である。それまでのバロック様式は見る者に強烈な印象を与える装飾が特徴の建物であったが、それらに飽きた宮廷の人々が新しい装飾の趣味として生み出したのが「ロココ」である。ロココ様式の特徴は室内の装飾にある。まず非対称的な模様や曲線が多く使われるようになった。さらに曲線文様と彫像で覆われることによって壁面と天井との境界が無くなり、室内が一体的になった。シェッツラー宮殿でこの特徴が顕著にみられるのが「祝祭の間」である。淡い色合いを基調とした華麗な室内で色々なところに曲線があるのが分かる。また天井と壁の境

目に豪華な彫刻装飾がある点もロココの特徴がはっきりと表れている。祝祭の間以外にもこの建物には面白い点がある。それは祝祭の間までの道のりである。よくある廊下ではなく、部屋がいくつも並んでいて、すべての扉を開けると長い廊下の様に祝祭の間まで一直線に繋がる。多くの招待客たちが祝宴が始まるまでそこで歓談やお酒を楽しんだりした。現在はバロック美術館や州立絵画館として利用されているため、その部屋も絵画や美術品が展示されている。



祝祭の間へ続く廊下



祝祭の間

6 住宅

ホストファミリーの家以外は入ることがなく、その周辺の住宅を外から見るこし

かできなかったが、どの家も非常に大きいなという印象を受けた。アウクスブルク市の住宅は平屋や1階建てのものが多く、それぞれに庭がついていたりして3方とも家が密着しているような住宅はほとんどなかった。これは敷地が広いため家の周りに庭や植栽のスペースが設けられるためである。これに対し日本・尼崎市の住宅地を見ると、3階建てや2階建ての家がひしめき合っていて、2,3歩歩けばすぐ隣の家の玄関が見えてくる。7日間ホストファミリーの家で暮らしてみて、リビングも個室もお風呂もすべてが広く、庭でバーベキューもでき、家の外でも中でもペットの犬や猫と遊ぶことができた。とても羨ましく、日本でもこのような家に住みたいと思った。しかしこの魅力的な向こうの住宅にも現在問題点があるという。共に行動してくれたアウクスブルク市の方とお互いの国の住宅の話をしたとき、このままでは土地が足りなくなると言っていた。少しずつではあるが人口が増えており、今のままだと建てる場所がなくなる。したがって今後は日本のように小さい敷地でも効率よく機能的に建てるのが大事になってくる。ドイツは日本の住宅建築を学ばなければならないと現地の人はいう。もちろん問題点だけでなく素晴らしい点もある。向こうの住宅はすぐ壊してしまうのではなく、ダメなところを少しずつリフォームし、何10年、何100年と使用する。日本の住宅建築もドイツのこのような点を取り入れる必要があると考える。ドイツも日本もお互いの良い点を学ぶ合うことが大切になる。

7さいごに

今回取り上げた以外にもたくさんの建物を

を見てまわった。歴史的建造物を見学した時は、これまで文字や図で理解してきたものを自分の目で確認することができ、その建物の歴史や教科書には載ってないような小さな情報をガイドさんから聞くことができた。また公共施設などは、日本の施設にもあったらいいなと思うものや、これはドイツの気候や習慣から生まれたもので日本での活用は難しいかな、など、比較することができた。実際に現地の人の話を聞き、目で見ることで、本やネットからとは違うものを得られたことは非常に良い経験となった。